新しく作られた短縮語使用に関する世代間比較

玉岡賀津雄
レベント・トクソズ

要旨: 本研究は，新しく作られた短縮語 14 種類と従来からある短縮語(『広辞苑』に掲載されている語)7種類の合計 21 種類について、広島地域に住む 10-20 代の 108 名と 30-40 代の 86 名の男女に対し、主観的使用頻度(1の「全く使わない」から5の「よく使う」までの5段階評価)を質問紙で調査した。2世代の主観的使用頻度でクラスタ分析を行った結果、3つの分類が得られた。分類Ⅰは、「スタバる」、「セブる」、「レラする」などの'若者言葉'で、両世代ともあまり使わない短縮語であった。分類Ⅱは、両世代でよく使われる短縮語で、従来から使われてきた「パソコン」、「エアコン」とともに、「着メロ」や「メル友」を含む。これらは、携帯電話や電子メールなどの情報技術の革新の影響で、世代を超えて一般に使用されるようになり、'若者言葉'の域を超えて広く受け入れられるようになった短縮語といえよう。分類Ⅲは、「キモい」、「ムズい」、「コクる」、「アケオメ」など 10-20 代の世代のみで頻繁に使われ、まさに'若者言葉'と呼ばれる短縮語である。以上のように、分類Ⅰの短縮語は近い将来消滅していくことが予想される一方で、分類Ⅱは世代を超えて使用され、やがては『広辞苑』にも掲載される語となる可能性が高い。そして分類Ⅲは、特定世代でのみ共有される表現となるのではないかと予想される。30-40 代でよく使われ、10-20 代であまり使われないという短縮語はなかった。この結果は，これらの短縮語が、若い世代でよく使用され，それがより広く他の世代でも使われるようになるという流れを反映していると思われる。

キーワード：短縮語，若者言葉，主観的頻度，世代間比較

1. はじめに

「マスコミュニケーション」のような長い語は、「マスコミ」と短縮されることがある。日本語には、頻繁に使用される単語や表現のモーラ数が多い場合、省略して発音

される傾向がある。これらは「短縮語」あるいは「略語」と呼ばれる。誰かが短縮語を作り、それが一般に定着した短縮語には、「パソコン (パーソナルコンピュータ)」、「通販 (通信販売)」などがある (『広辞苑・第五版』に収録されている。以下、『広辞苑』は第５版を示す)。しかし、まだ作られたばかりの新しい短縮語や、一部の層のみで用いられる短縮語もある。新しい短縮語は「若者言葉」の類とみなされることが多く、「コクる (愛を告白する)」、「キモい (気持ちが悪い)」、「即レス (メールにすぐに答えること)」、「自己中/ジコチュー (自己中心的)」などが『若者言葉事典』(亀井, 2003) や『若者ことば辞典』(米川, 1997) に収録されている。このように短縮語の定着率は様々であるが、それらの取り入れ方は世代によって異なるのだろうか。

また、短縮語の構成にはいくつかのタイプがある。まず一つの語が短縮されたものがあり、「入試 (入学試験)」、「事故る (事故する)」、「うざい (うざったい)」などとなる。複数の語の組み合わせを短縮したものもある。「遅番」は「遅い当番」というように形容詞と名詞が組み合わさったものであるし、「激痩せ (劇的に痩せる)」は副詞と動詞が結びついて短縮しさらに名詞化したものである。「アケオメ (あけましておめでとう)」のように文レベルの慣用表現の短縮語もある。そのようないくつかの短縮語のタイプがある中で、どのようなものが一般に受け入れられ、どのようなものが受け入れられにくいのかといった違いはあるのだろうか。本研究では、短縮語の使用実態が世代によって異なるかどうかについて、短縮語構成のタイプと関連付けながら探索的に検討する。

2. 方法

2.1 被験者

2004 年９月から 10 月にかけて、広島県在住の 10-20 代の 108 名と、30-40 代の 86 名の合計 194 名を対象とした質問紙調査を実施した。10-20 代は、平均月齢が 253 ヵ月 (21 歳１ヵ月) で、標準偏差は 67 ヵ月 (５歳７ヵ月) であった。30-40 代は、平均月齢が 457 ヵ月 (38 歳１ヶ月)、 標準偏差は 54 ヵ月 (４歳６ヵ月) であった。各世代の性別の内訳は、10-20 代では女性 53 名と男性 55 名で、30-40 代では女性 36 名と男性 50 名であった。等確率を空仮説とするカイ二乗分布を利用した一様性検定の結果では、被験者の世代と性別で分けた場合の人数の分布に有意な違いはなかった [$\chi^2(1)=1.003$, $p=.317$]。短縮語使用への地域差の影響も考えられるが、本研究は広島地

域のケーススタディに留まる。10-20 代の被調査者は、広島在住期間の長い大学生および大学院生であり、30-40 代の被調査者は、広島国際空港の待合室または到着ロビーにいた広島地域在住者である。

表１　調査対象とした21の短縮語の辞典掲載の有無および新聞での使用実態

短縮語の種類	短縮語	『広辞苑』第五版	カタカナ語辞典	朝日新聞での使用頻度
一般的な短縮語（『広辞苑』に掲載されている）	パソコン	有	有	15,390
	デモ	有	有	9,532
	リストラ	有	有	3,891
	エアコン	有	有	1,751
	コネ	有	有	408
	ロリコン	有	有	24
	生コン	有	—	0
新しい短縮語（『広辞苑』に掲載されていない）	着メロ	無	—	0
	メル友	無	—	0
	就活	無	—	0
	スッチー	無	有	0
	エアロビ	無	無	5
	ダチ	無	—	5
	ケシ	無	—	0
	アケオメ	無	—	0
	コクる	無	—	0
	レラする	無	—	0
	スタバる	無	—	0
	セブる	無	—	0
	キモい	無	—	0
	ムズい	無	—	0

注：‘—’は，カタカナ語ではない.

2.2 短縮語の選択（21 語）

本研究の質問項目とする短縮語は 21 種類に限定した。これは、多様な世代の被調査者からの協力を得るために調査時間を短く設定する必要があったためである。短縮語の選択に際して、『広辞苑』に掲載されているかどうかを基準として、一般的に受け入れられているとみなせるか、新しく作られたと考えられるかによる比較が可能となるようにした。『広辞苑』に掲載されている短縮語を７語 (以下、「一般的な短縮語」とする)、『広辞苑』に掲載されておらず、最近使われるようになったと推測される短縮語を 14 語 (以下、「新しい短縮語」とする) を選択した。表１の通り、３分の１が

「一般的な短縮語」、３分の２が「新しい短縮語」という内訳である。

2.2.1 一般的な短縮語（7 語）

『広辞苑』に掲載されている一般的な短縮語 7 語は、新聞記事における出現頻度が多様であるように選択した。天野・近藤 (2000) の 1985 年から 1998 年までの朝日新聞の記事をデータベースとした語彙コーパス (延べ頻度が 287,792,797 語) によると、本研究で用いる 7 語の出現頻度は、「パソコン」が 15,390 回、「デモ」が 9,532 回、「リストラ」が 3,891 回、「エアコン」が 1,751 回、「コネ」が 408 回、「ロリコン」が 24 回、「生コン」が 0 回と幅広い (表１)。またカタカナ表記語については、『パーソナルカタカナ語辞典』(金田一春彦 監修, 1999) を使って掲載の有無を確認したところ、「生コン」以外の６種類の短縮語はすべて掲載されていた (表１)。

2.2.2 新しい短縮語（14 語）

新しい短縮語は、『広辞苑』に掲載されていないこと、朝日新聞 (1985 年から 1998 年) に使用が見られないことを基準として選択した。ただし、「エアロビ」と「ダチ」はそれぞれ５回ずつ朝日新聞での掲載があった。本研究で調査項目とした 14 語は、辞典や新聞といった公的な資料にほとんど姿が見られない、つくられたばかりの語彙であるとみなすことができる。また、「スッチー」と「エアロビ」の２つのカタカナ表記語について『パーソナルカタカナ語辞典』(金田一春彦 監修, 1999) で確認したところ、「エアロビ」は掲載されていたが「スッチー」は掲載されていなかった。

2.3 質問紙

質問紙では、被調査者の性別と年齢を尋ねた後、短縮語の主観的使用頻度を尋ねた。図1は、調査に使用した質問紙の抜粋である。調査項目とした 21 の短縮語について、どのくらい頻繁に使うかを、1「全く使わない」、2「たまに使う」、3「ときどき使う」、4「けっこう使う」、5「よく使う」の中から一つ選択してもらった。また質問紙では、短縮語の右横に短縮される前の表現を併記した。さらに、被調査者が5段階の尺度について等間隔性をイメージできるように、ヒトの顔を等間隔で大きくしながら1から5までの各数値の上に示した。表1に示した 21 の短縮語を、順不同に提示した。

2.4 調査の手順

10-20 代の被調査者 (学生) に対しては、適宜まとまった人数で回答を依頼し、30-40 代の広島国際空港にいた被調査者には一人ずつ依頼した。その際、研究目的であること、個人のデータを公表しないこと、プライバシーを厳守することを口頭及び紙面で伝え、回答の承諾が得られた場合に質問紙を手渡し、その場で回答してもらった。質問紙の回答時間は 10 分以内であった。

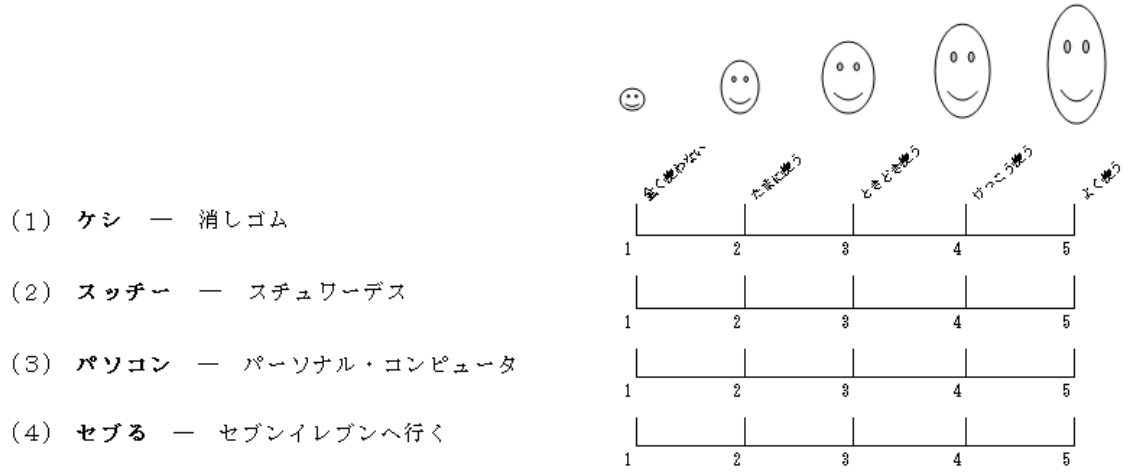

図１　短縮語の主観的使用頻度を尋ねる質問紙の抜粋

3. 結果と考察

3.1 短縮語の使用頻度: 分散分析による世代差と性差の検討

各短縮語の主観的使用頻度について、世代と性別を変数とする２×２の分散分析 (タイプⅢの平方和を使用) を行った。表２に主観的使用頻度の全体の平均を大きい順に示した。平均４以上が５語、３以上４未満が６語、２以上３未満が５語、１以上２未満が５語で、１以下はなかった。

表２の右側に分散分析の結果を示した通り、世代の主効果は 12 種類の短縮語に見られ、すべての語で、10-20 代の若い世代が 30-40 代より平均が高かった。世代差が見られた短縮語は、全体の平均が高いものもあれば低いものもあった。これに対して、性別の主効果が認められたのは５種類の短縮語のみであり、世代差同様、使用頻度が高いものから低いものまであった。

また、世代と性別の交互作用は「エアロビ」[$F(1,190)=6.639, p<.05$] と「コネ」

表２　世代と性別でみた主観的使用頻度の平均および分散分析の結果

短縮語	種別	全体の平均	10代から20代の平均		30代から40代の平均		分散分析の結果		
			女性	男性	女性	男性	性別	世代	交互作用
パソコン	一般的	4.97	5.00	4.98	4.97	4.94			
エアコン	一般的	4.77	4.98	4.76	4.83	4.50	*		
着メロ	新しい	4.52	4.87	4.82	4.39	3.92	*	***	
リストラ	一般的	4.46	4.81	4.49	4.28	4.20		**	
エアロビ	新しい	4.04	4.17	4.35	4.19	3.44		*	*
コネ	一般的	3.87	4.17	4.00	3.19	3.88		**	*
メル友	新しい	3.82	4.23	4.27	3.42	3.20		***	
デモ	一般的	3.80	3.66	3.96	3.36	4.10	*		
ロリコン	一般的	3.80	4.19	4.24	3.22	3.32			
キモい	新しい	3.65	4.58	4.40	2.81	2.46		***	
ムズい	新しい	3.38	4.32	4.42	1.83	2.34		***	
コクる	新しい	2.99	4.17	4.16	1.67	1.40		***	
就活	新しい	2.61	3.62	3.76	1.19	1.28		***	
アケオメ	新しい	2.46	3.00	3.20	1.92	1.46		***	
スッチー	新しい	2.44	2.68	2.85	2.14	1.94		***	
生コン	一般的	2.42	1.83	2.42	2.47	3.00	*	**	
ダチ	新しい	1.99	1.70	2.36	1.44	2.30	***		
ケシ	新しい	1.74	1.57	1.96	1.56	1.80			
スタバる	新しい	1.33	1.28	1.56	1.17	1.24			
セブる	新しい	1.07	1.09	1.05	1.08	1.06			
レラする	新しい	1.03	1.02	1.00	1.03	1.06			

注1：全体=194名．女性=89名．男性=105名．　10代後半から20代=108名．　30代から40代=86名．
注2：＊　$p<.05$．　＊＊　$p<.01$．　＊＊＊　$p<.001$．

[$F(1,190)=4.497, p<.05$] の２種類に認められた。しかしこの2語の傾向は異なっている。「エアロビ」の交互作用は、30-40 代の男性のみが特に低いことによるが、「コネ」の交互作用は、30-40 代の女性のみが特に低いことによるものである。ここから、30-40 代では、男性と女性とで短縮語の使用領域が異なり、それぞれ身近な領域外の短縮語の使用には消極的であることが窺える。それに比べると、10-20 代では、男女ともに幅広い領域で積極的に短縮語を用いようとすることがみてとれる。

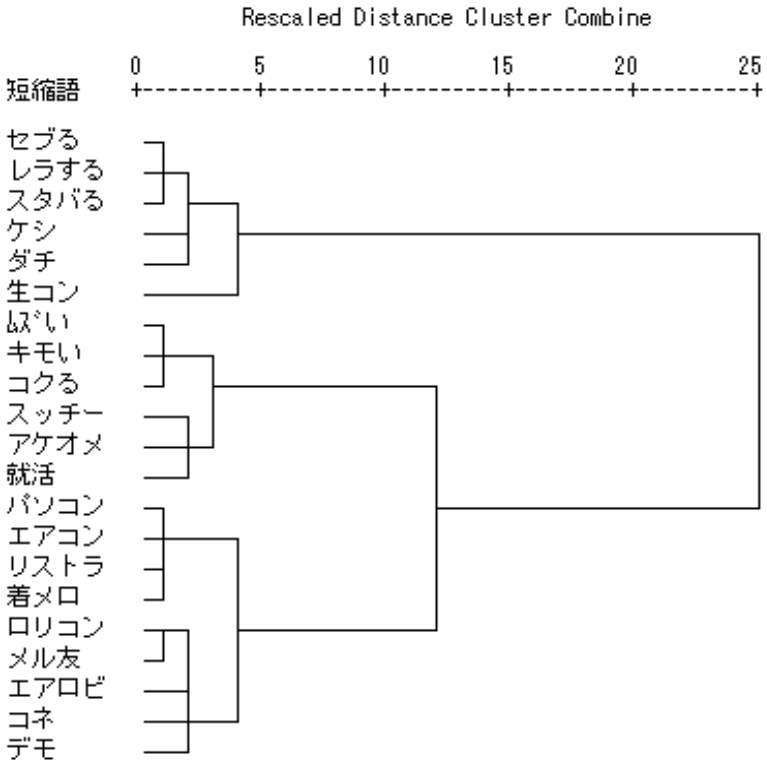

図2　21種類の短縮語について行ったクラスタ分析のデンドログラム

注1：短縮語数=21．クラスタ分析は194名全員の主観的使用頻度で行った．
注2：クラスタ間の距離はウォード法，短縮語の距離は平方ユークリッド距離による．

3.2 各世代の短縮語使用傾向：クラスタ分析による分類

本研究で対象とした短縮語 21 語に関して、世代の影響による特徴が浮かび上がってきた。そこで、さらに世代の違いを詳細に検討するために、今回の調査対象となった 194 名全員のすべての短縮語に対する主観的使用頻度（１から５までの尺度）に基づき、クラスタ分析によって 21 の短縮語を分類した。クラスタ間の距離にはウォード法、短縮語間の距離は平方ユークリッド距離によって測定した。その結果、図２のデ

ンドログラム (樹形図) に示した通り、三つの分類 (クラスタ) が見出された。まず、分類Ⅰと、分類Ⅱおよび分類Ⅲとが、このクラスタ分析の手法で最高値である 25 の値で区別された。また、分類Ⅱと分類Ⅲとが 12 の値で区別された。分類Ⅱは、さらに４の値で下位分類１と下位分類２とに区別されているが、これは値が低くほぼ同じ分類であるとみなすことができる。

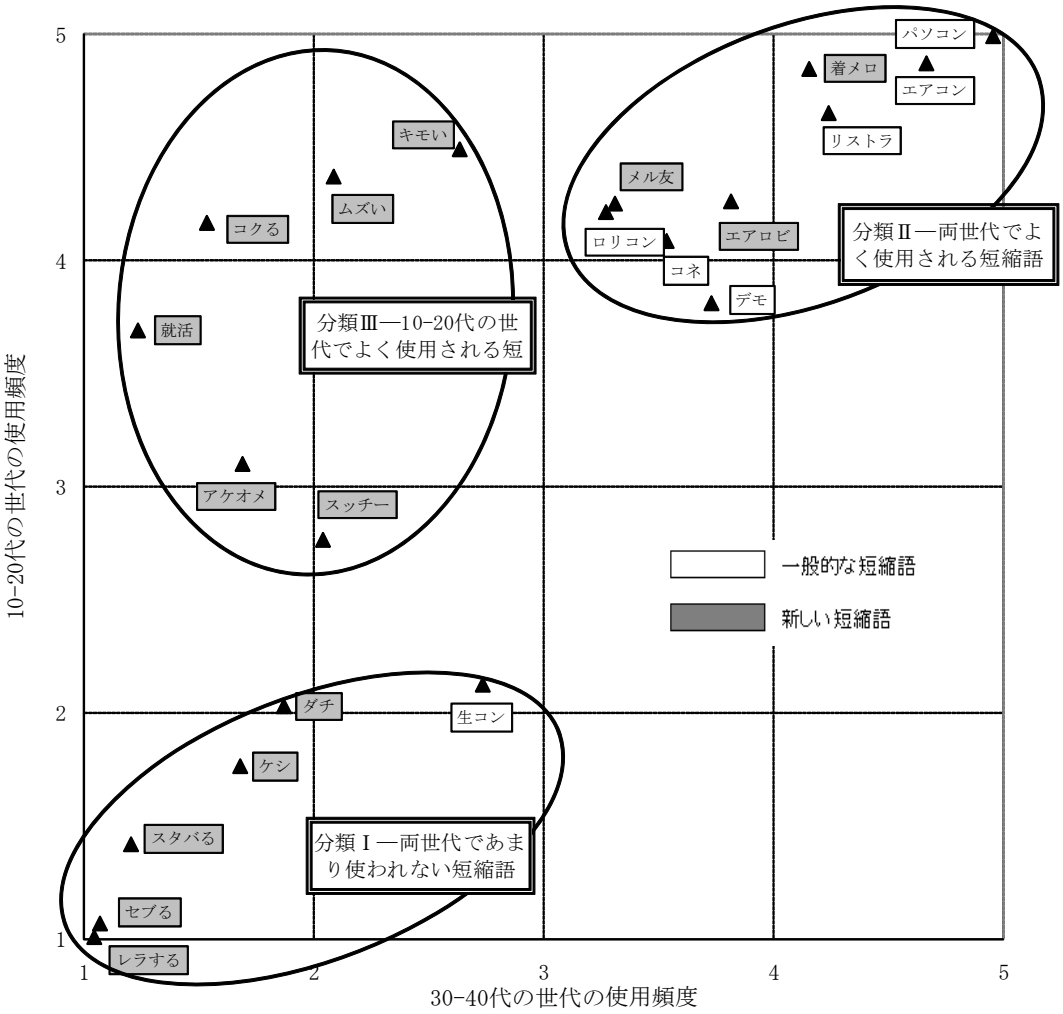

図3　短縮語に関する10−20代と30−40代の世代の主観的使用頻度のプロッテリングとクラスタ分析
注1：短縮語数=21．クラスタ分析は194名全員の主観的使用頻度で行った．
注2：クラスタ間の距離はウォード法，短縮語の距離は平方ユークリッド距離による．

次に、10-20 代の世代と 30-40 代の世代での短縮語の平均使用頻度を図３にプロットし、このクラスタ分析の結果に基づいた分類を示した。分類Ⅰは、10-20 代と 30-40

代の両方にあまり使われない短縮語であり、分類Ⅱは、両世代ですでに受け入れられた短縮語といえよう。分類Ⅲは、10-20 代にはよく使われるが 30-40 代にはあまり使われない短縮語である。

3.2.1 分類Ⅰ—両世代であまり使われない短縮語

10-20 代の世代にも 30-40 代の世代にもあまり使われていない分類Ⅰには、6 つの短縮語が含まれている。6 つのうち 5 つが、『広辞苑』に掲載されていない新しい短縮語であった。まず、「セブる」と「スタバる」は、それぞれ「セブンイレブンへ行く」と「スターバックスへ行く」の短縮語で、近年のコンビニエンスストアやカフェの普及とともに作られた表現である。「スタバる」は、コーヒーショップのスターバックスがより広く日本中で好調なビジネスを展開し続ければ表現が定着する可能もあるかもしれないが、少なくとも広島地域では「コーヒーを飲む」という表現に代用されるほど一般化した表現とはなっていない。これと類似した傾向は、「セブる」にもみられる。多様なコンビニエンスストアが全国に展開している中で、「セブンイレブン」のみが突出して短縮語化されにくいのかもしれない。これらは、「連絡する」が短縮した「レラする」とともに、使用頻度は非常に低かった。これらよりやや高めの使用頻度を示したのは、「ダチ (友達)」と「ケシ (消しゴム)」である。唯一、一般的な短縮語の「生コン」が分類Ⅰに入っている。建設業に関係した短縮語であるため、本調査の被験者の多くには実生活とあまり関係がなく、馴染みが薄かったと思われる。

3.2.2 分類Ⅱ—両世代で受け入れられた短縮語

分類Ⅱは、10-20 代の世代でも 30-40 代の世代でも頻繁に使われている短縮語である。ここには 9 語含まれており、そのうち 6 語が『広辞苑』に掲載されているものである。中でも両世代で特によく使われているのは、「パソコン (パーソナルコンピュータ)」と「エアコン (エアコンディショニング)」であった。いずれも一般的に普及している電化製品である。また、「リストラ (リストラクチュアリング)」や「コネ (コネクション)」や「デモ (デモンストレーション)」など、社会情勢上重大な関心を集めた短縮語が一般に定着し (『広辞苑』に掲載されるまでになり)、実際にも頻繁に用いられているのであろう。「ロリコン (ロリータ・コンプレックス)」も、1980 年代に普及した現象であり、廃れずに定着していることがみてとれる。

残りの３語は、『広辞苑』に掲載されていない新しい短縮語であった。「着メロ (着信メロディ)」と「メル友 (メール友達)」は、近年の携帯電話の急速の普及に伴い世代を超えて一般化した短縮語だといえる。「エアロビ (エアロビクス)」は、元の形は『広辞苑』に掲載されているものの、短縮形はない。『広辞苑』に掲載されていなくとも、定着してきていることが分かる。

3.2.3 分類Ⅲ—10-20 代の世代にのみに使用される短縮語

分類Ⅲは、世代の違いが明瞭にみられる短縮語である。ここに含まれる５つの短縮語は、すべて『広辞苑』に掲載されていない新しい短縮語である。いわゆる「若者言葉」であり、30-40 代では使用されないようである。若者には、とりわけ「キモい (気持ち悪い)」、「ムズい (難しい)」、「コクる (愛を告白する)」の３語が頻繁に使われるようである。いずれも感情や恋愛に関する表現で、彼らの日常に密接に関わるので浸透しやすかったと考えられる。大学卒業後の進路に関する「就活 (就職活動)」も、大学生の重大な関心事である。「スッチー (スチュワーデス)」は、『パーソナルカタカナ語辞典』には掲載されているものの、使うのは 10-20 代の世代のみで、一般化した表現とはいえないようだ。さらに、「アケオメ (明けましておめでとう)」は、携帯電話での電子メールの普及に関係がありそうである。長い文を短い短縮語的な表現に置き換えることは、携帯電話での電子メールの発信に好都合である。親子で電子メールをやりとりするなど世代間でのコミュニケーションを介して、今後こうした短縮語が定着していくことも考えられよう。新しい短縮語が世代を超えて広く使用されるようになる背景要因として、心理・社会・歴史的背景ばかりでなく、「情報技術の革新」による影響があることも示唆される。

4. 総合考察

本研究における限られた数の短縮語のクラスタ分析によれば、短縮語は、両世代ともに受け入れられているもの、両世代ともに受け入れられないもの、そして 10-20 代のみに受け入れられているものという３つのパターンがある。30-40 代のみが受け入れている短縮語 (図３のプロッテリングの右下に位置する短縮語) はなかった。短縮語は、基本的に若い世代が柔軟に取り入れようとする態度を持っていることが示唆される。30-40 代は、分類 II の両世代でよく使用される短縮語に含まれるものが「パソ

コン」「エアコン」「着メロ」「リストラ」などであることから分かるように、自分の日常生活と関わりの大きい短縮語を用いている。それに対して、10-20 代の若い世代は、30-40 代よりも幅広い領域の言葉を短縮語化していることが窺えた。

これらの３つのパターンのそれぞれについて、短縮語構成の観点から特徴が見られるかどうか考えてみる。まず両世代でよく使用される短縮語 (分類 II) は、すべて外来語の (または外来語を含む) 名詞の短縮語である。さらにこれらは、この分類の中で比較的主観的頻度の低い「コネ」と「デモ」を除いて、２モーラずつの２フットで４モーラとなった語であり、２つの単語を短縮して組み合わせる場合には頻繁に見られるタイプである。英語などが日本語に外来語として取り入れられる場合、(C)VC のような閉音節に母音が加えられて(C)VCV の２モーラとなったり、VV の重音節が２モーラとして扱われることになったりするため、モーラ数が多くなりやすく、したがって短縮語化されやすい。外来語やそれを含む言葉は短縮語しやすく、またそれが広い世代に受け入れられやすいといえそうだ。

上記のよく使用される短縮語 (分類 II) はいずれも名詞であったが、これらに比べて動詞や形容詞など形態素変化を伴う短縮語は、一般に定着しにくいようである。10-20 代にのみよく使われる短縮語 (分類 III) には、「キモい」「ムズい」「コクる」などが含まれているとおり、若い世代は比較的柔軟なようであるものの、「スタバる」「セブる」「レラする」などは、若い世代にさえほとんど用いられていない(両世代であまり使われない分類 I に含まれている)。特定の固有名詞 (ここでは店舗名) が短縮語として定着することは、たとえその固有名詞の知名度が高くとも、とりわけ難しいようである。社会的な背景とそれを取り込む地域性に左右されるため、一度は作られたとしても社会の急激な変化に伴って早い消滅を招くと考えられる。若い世代は、同じ造語法による (形態素変化を伴う) 短縮語も、受け入れるものと受け入れないものがあるようだ。今後その背景要因を探る必要があろう。

若い世代が頻繁に使う短縮語が他の世代に受け入れられるかどうかが、日本語の語彙として定着するかを決めることになる。例えば「就職活動」は、2004 年調査時には 10-20 代の世代で「就活」がかなり使われており 30-40 代には使われていなかった。その後これを利用した「婚活 (結婚活動)」や「離活 (離婚活動)」などの短縮語も作られている通り、「○○活動」の造語法は勢力を増している。この力によって、やがてこの語が、「経世済民」の短縮語として生まれた「経済」のように普通に使われる漢字二字

熟語となるかもしれない。造語法の観点からは伝統的な漢字四字熟語を二字熟語にするという方法であるため、「就活」は受け入れられやすい短縮語と予想できる。

その一方で、 若い世代が頻繁に使う短縮語も、他の世代に受け入れられなければ劣化していく。「ナウい」などのように、流行していた時期に若者だった使い手が、その勢いが過ぎ去って廃れた後にも使えば、新たな若者に古臭いと笑われることになる。「キモい」「ムズい」などは、「ナウい」と同様に形容詞語尾「い」を付加してできた短縮語であるが、この造語法が他の世代には受け入れられにくい (両世代でよく使用される分類 II には全く含まれていなかった) 傾向からすれば、次の世代には劣化して「古臭い」短縮語とみなされる可能性も考えられる。実際、1992 年と 1994 年のわずかに２年間の違いを調査した結果(米川, 1998)でも、「ぱしり」(使い走り) の使用率が 24.6 パーセントも増加したとか、「バッチグー」(うまくいった)が 22.5 パーセントも減少したなど、類似集団内の短期間でさえ大きな変化が報告されている。分類 III に含まれる６つの短縮語がさらなる変化を経て定着か劣化かどちらの道を辿るのか、今後の観察が必要である。

５．おわりに

本研究では、21 語という限られた短縮語の使用実態の世代差について、分散分析及びクラスタ分析に基づいて検討してきた。その結果、英語などが日本語の外来語として取り入れられる場合にはモーラ数が多くなりやすいために短縮語化されやすく、とくに名詞形が幅広い世代で定着しやすい傾向を見せた。また、動詞や形容詞としての、動詞語尾の「る」や形容詞語尾の「い」を付けた造語法による形態素変化を伴う短縮語は、若い世代には使われても 30 代以降には受け入れられにくいということも示唆された。本研究では名詞としての外来語のみを扱い、形態素変化を伴う外来語を扱わなかったが、例えば「ダブる (ダブル＋する)」「トラブる (トラブル＋する)」「バトる (バトル＋する)」などの短縮語はどのように受け入れられているのか、世代別に検討する余地が残る。さらに多様な語構成の短縮語を対象として検討したい。

また、本研究の３つの分類は、新しく作られた短縮語の「出生死滅過程 (birth-and-death process)」を反映していると捉えることもできる (e.g., Altmann, 1985; Tamaoka & Altmann, 2004)。一時期は若い世代で頻繁に使われていても、次第に使われなくなり、やがては古い世代の表現となってしまう短縮語もある。また、一部の世代

で短期間だけ使われ、すぐに消えていくものも少ないないであろう。これらの短縮語の発生には、米川(1998)が述べているように心理的・社会的・歴史的な背景が強く影響しているであろう。それに加えて、21 世紀を迎えた今日においては、情報技術の革新が、新しい短縮語の発生と使用に強く影響していることも、本研究において示唆されている。このような絶え間のない出生死滅過程とそこに影響を及ぼす背景的要因とを関連付けて検討するための調査を進めることも、今後の課題である。

[引用文献]

Altmann, Gabriel (1985) Die Entstehung diatopischer Varianten - Ein stochastisches Modell. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft,* **4**, 139-155.

天野成昭・近藤公久 (2000) 『ＮＴＴデータベースシリーズ第７巻　日本語の語彙特性－朝日新聞の語彙・文字頻度調査』三省堂　(詳細は，三省堂のウェブサイト www.sanseido-publ.co.jp/publ/ntt_database.html を参照)

亀井肇 (2003)『若者言葉事典』日本放送出版協会.

金田一春彦 (監修) (1999)『パーソナル カタカナ語辞典』学習研究社.

新村出(編) (1998) 『広辞苑・第五版』岩波書店

田原広史 (1988) 北関東における共通語化の状況—地域・年齢・言語意識. 大阪大学日本学報　**7**, 121-145.

Tamaoka, Katsuo and Gabriel Altmann (2004) Symmetry of Japanese kanji lexical productivity on the left- and right-hand sides. *Glottometrics*, **7**, 68-88.

佐藤和之・米田正人 (編著) (1999) 『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ』大修館書店

米川明彦 (1997) 『若者ことば辞典』東京堂出版

米川明彦 (1998) 『若者語を科学する』明治書院

吉田雅子 (2003) 第２章－世代とことば　ダニエル・ロング，中井精一，宮治弘明(編)『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界思想社 pp.74-82.

玉岡　賀津雄　(たまおか　かつお; TAMAOKA, Katsuo)
名古屋大学大学院国際言語文化研究科・　教授
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
E メール: ktamaoka@lang.nagoya-u.ac.jp
ホームページ: http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~ktamaoka/

レベント・トクソズ (TOKSOZ, Levent)
広島大学大学院文学研究科　大学院生
〒739-8511　東広島市鏡山一丁目 3 番 2 号

Generational differences in use of newly-created shortened Japanese words

TAMAOKA, Katsuo
(*Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University, Japan*)
TOKSOZ, Levent
(*Graduate School of Letters, Hiroshima University, Japan*)

The present study investigated the use of newly-created shortened Japanese words. Using participants from the Hiroshima region, 108 males and females in their late teens to 20s, and 86 males and females aged in their 30s and 40s were asked to rank the subjective frequencies of use for 21 shortened words (14 newly-created, and 7 more established words, i.e., those which are found in the *Kojien* Japanese dictionary). A cluster analysis depicted three distinct classifications. Cluster I consists of shortened words infrequently used by either the younger or older generations, including the established word *nama-kon* ('wet concrete') as well as newly-created youth slang such as *sutaba-ru* ('to go to Starbucks'), *sebu-ru* ('to go to a convenience store, particularly a 7-11'), and *rera-suru* ('to contact someone'). The durability of these words is questionable due to their infrequent use. Cluster II includes frequently used, newly-created, shortened words such as *chaku-mero* ('receiving e-mail melody'), *meru-tomo* ('e-mail friends') as well as established Japanese words such as *paso-kon* ('personal computer') and *ea-kon* ('air conditioner'). Due to innovations in mobile telephones and e-mail communication technology, these new words have come to be used widely by Japanese of various ages. Cluster III includes so-called *youth slang*, *kimo-i* ('feel ill'), *muzu-i* ('difficult'), *koku-ru* ('express one's love') and *ake-ome* ('A Happy New Year') which may remain in use only among members of the current youth generation.

Keywords: newly-created shortened Japanese words, generational comparison, subjective frequencies